

戦後70年 歴史認識問題とは何が「問題」なのか

人生においても国家の歴史においても、思い出すのもおぼろしいほどに辛い過去はありうる。戦争は、その最たるものである。それでも、これを癒してくれるものがある。「時間」である。いかに辛苦の過去であっても、時間の経過とともに記憶は薄れ、やがて消失していくというのが人間と社会の経験則である。「時間と忘却」こそ、神が与え給うた最大の救済のように私には思われる。



拓殖大学学事顧問 前総長 渡辺 利夫

戦前、戦中期の日本のありようを深く自省しない日本人は、かつてはほとんどいなかったのではないかと。それが「歴史認識問題」として政治問題となったことは、少なくとも1980年代初期までの日本にはなかった。事実、「歴史認識問題」などという表現自体が存在していなかったのである。

それが、戦争が終わって30数年を経過したある時点から突如として日本国内で表面化し、次いで中国、韓国との外交問題にまで発展していった。これが「歴史認識問題」である。「歴史認識問題」がいかなる経緯をもって表面化したのか、ごく簡単にみておこう。

1982年6月、旧文部省の教科書検定により、「侵略」が「進出」に書き換えさせられたという日本の時のジャーナリズムの誤報に端を発し、その報道に中韓が猛烈に反発し

たことになった。中韓の反発を受けて、近現代史の記述において近隣アジア諸国への配慮を求める「近隣諸国条項」といわれる新検定基準が同年8月に時の内閣官房長官・宮沢喜一氏の談話として出され、日本の歴史教科書に対する中韓の介入に論拠を与えてしまった。

非難が集中的に開始されたのは、やはり中曽根参拜以降のことであった。もう一つの焦点は、従軍慰安婦問題に関する朝日新聞の一昨年8月5日、6日付の一連の検証報道である。ここでは、吉田清治証言には信憑性がなく、これに関する同紙記事をすべて取り消すこと、女子挺身隊と従軍慰安婦との混同についての訂正は一切せず、逆に慰安婦問題の本質は広義の強制性、女性の人權問題にあるといった主張に転じ、何と問題のこの「すりかえ」は一昨年8月の検証特集でも継承されて今にいたっている。

訂正は一切せず、逆に慰安婦問題の本質は広義の強制性、女性の人權問題にあるといった主張に転じ、何と問題のこの「すりかえ」は一昨年8月の検証特集でも継承されて今にいたっている。

つついて起こったのが、靖国参拜問題である。1985年8月の中曽根康弘首相の参拜にいたるまで、首相の靖国参拜は恒常的であったが、日本国内でこれが政治問題となることはなく、もちろん外国からの反発もなかった。A級戦犯合祀問題の事実が内外に知られるようになったのは1979年4月のことだが、それ以降も、中曽根参拜まで20回を超え、首相参拜がなされたが、中韓の非難はな

検証が不十分であったことを認めた。朝日新聞の慰安婦問題報道がプロパガンダの様相を呈したのは、特に1991年に始まり翌年以降に激しさを増した一連の報道であった。その後、秦郁彦氏や西岡力氏などの専門家の精力的な検証により、同紙記事が捏造を含む根拠不明なものであることが明らかになった。新聞は記事取り消しや

「わたなべ」として1989年6月甲府市生まれ。慶応義塾大学、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学総長を経て現職。外務省国際協力に関する有識者会議議長。外務大臣表彰。正論大賞。著書は「成長のアジア 停滞のアジア」(吉野作造賞)、「開発経済学」(大平正芳記念賞)、「西太平洋の時代」(アジア太平洋賞大賞)、「神経症の時代」(開高健賞)、「放散と山頭火」(死を生きる)「ちくま文庫」など多数。

日本人が日本人を克服しなければ 解決をみない、深刻な「日日問題」

な責任を朝日新聞は背負ってしまった。朝日新聞にとって必要なのは、「歴史」に目をむけまい(1992年1月12日、社説)ではなく「事実」に目をむけまい」という姿勢に他ならない。

「歴史認識問題」とは、中国や韓国との問題でもなければ、ましてや日米問題のテーマではまったくない。「歴史認識問題」とは、「日日問題」に他ならないのである。1939年生まれの私には、本当に説得力のある岡崎氏の論理である。

「歴史認識問題」とは、中国や韓国との問題でもなければ、ましてや日米問題のテーマではまったくない。「歴史認識問題」とは、「日日問題」に他ならないのである。1939年生まれの私には、本当に説得力のある岡崎氏の論理である。

「わたなべ」として1989年6月甲府市生まれ。慶応義塾大学、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学総長を経て現職。外務省国際協力に関する有識者会議議長。外務大臣表彰。正論大賞。著書は「成長のアジア 停滞のアジア」(吉野作造賞)、「開発経済学」(大平正芳記念賞)、「西太平洋の時代」(アジア太平洋賞大賞)、「神経症の時代」(開高健賞)、「放散と山頭火」(死を生きる)「ちくま文庫」など多数。